

# 適性検査Ⅰ

## 《注 意》

- 1 検査問題は **1** のみで、4ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は午前九時〇〇分から午前九時四十五分までの四十五分間です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

(問題は次のページから始まります。)

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学校に上がるころ、ほとんどの人が聞いたたり歌ったりした記憶があると思いますが、「一年生になったら」という歌があります。「一年生になったら、友だち百人できるかな」という歌詞なのですが、あれって結構強烈なメッセージですよ。小学校の一年生になったら、友だちを百人作りたい、あるいは百人友だちを作ることが望ましいのだという、暗にプレッシャーに感じた人も多いのではないのでしょうか。

学校というのは、とにかく「みんな仲良く」で、「いつも心が触れ合って、みんなで一つだ」という、まさにここで私は「幻想」という言葉を使ってみたいのですが、「一年生になったら」という歌に象徴されるような①「友だち幻想」というものが強調される場所のような気がします。けれど私たちはそろそろ、そうした発想から解放されなければならぬと思っています。

私が言いたいことは、「子供たちがだれでも友だちになれて、誰でも仲良くなれる」ということを前提にしたクラス運営・学校経営は、やはり考え直したほうがいいのではないのでしょうかということですね。

私は教育大学に勤めていますので、仕事柄、小中学校の校長先生

や先生方とお話をする機会も多いのですが、非常に人格が優れている、リーダーシップもある先生、教育現場で力を発揮していると定評のある先生ですら、というよりもだからこそかもしれません、やはり「子供たちというのはみんないい子たちだから、教師がサポートさえすれば、みんな一緒に仲良くできるはず」という前提で頑張っているようなのです。

どの学校でも、やはり「いじめゼロ」を目指しています。そのためのプランをうかがうと、「それにはみんなで一つになって」とか、「人格教育に力を入れて、心豊かな子どもたちを育てたい」「みんなで心を通い合わせるような、そんな豊かなクラスを作っていくたい」と思っているんです。でも、私はちょっとひねくれた人間ですから、「それは理想だろうし、努力目標として高く掲げるのはまあいいのかもしれないけれども、そういうスローガンだけでは、逆に子供たちを追い詰めることにならないかな」と、どうしても思ってしまうのです。

「○○ちゃん、そんな一人でいないで、みんなの輪に入りなさい」という言葉にかえて圧力のようなものを感じる子供や、みんなと一緒になれないということに氣にするあまり「僕はダメなんじゃないか」と思う子供も少なくありません。また理屈を超えて「こいつとはどうしても合わない」というクラスメートだっているはずですよ。

大人になってからは、みんな誰もがそういう体験をしているはずなのに、「子どもの世界はおとなの世界とは違う。子どものころはどんな子同士でも仲良く一緒にになれるはず」というのは、子どもの世界にあまりにも透明で無垢なイメージを持ちすぎなのではないでしょうか。

学校文化を振り返って考えると、これまではやはり「同質的共同性」という側面にしか目が向けられてこなすぎたのではないかと思います。

「クラスはみんな仲良く」という考え方には、昔はたしかに②現実的な根柢があったのです。

なぜなら、小学校はだいたいムラに一つだったからです。

「自然村」といわれる農村社会学の\*概念があります。行政村と対比される概念で、だいたい室町時代から江戸時代までの間に人びとが自然に集まってできた集落のことですが、明治時代になってこの自然村を基盤に小学校が建ってくるわけです。そうすると、そこは代々家族ぐるみで顔見知りの子供たちが集まることになります。お互い親同士も顔見知りで、場合によっては何代も前から、「あの家はこうで、こっちは家はああで」と知っていて、「あの家から今度は次男坊が入ってきた」というような、学校を支える地域ぐるみでの濃密な関係がはじめからできていたのです。

そういう中で学校やクラスの運営がされていたわけで、近隣ネット

トワークのあり方が今とは全然違うわけです。昔の濃密な近隣の支えがあっただけで、「クラスみんなが仲良くなれるかな」という状態だったのです。

おろん、昔のそういう時代だって、実際はクラス全員が仲良くなるといのは難しかったとは思いますが。でも、今に比べれば、ムラの共同的生活を核にした地域の支えがとて強かった。村中が総出で田植えや稲刈りを共同で行ったり、道路が傷めば\*道普請をし、共有林の\*下刈りなどの共同作業もありました。そうした地域の支えという現実的根柢があるからこそ、学校における共同性は実現していたわけです。

しかしとりわけ一九八〇年代以降は、都市部ばかりでなく地方においてもそういう支えがほとんどなくなってきていて、地域自体が単なる偶然にその場に住んでいる人たちの集合体になっています。同じ地域から学校に通ってきているといっても、先生方は今でもついつい「クラスは運命共同体だ」というような発想になりがちなのだけれども、子供たちは単なる偶然的な関係の集まりだとしか感じていない場合が多いのです。

こうした状況の中で、クラスで本当に「こいつは信頼できるな」とか、「この子といると楽しいな」という、気の合う仲間とか親友というものと出会えるということがあれば、それはじつは、すごくラッキーなことなのです。そういう友だちを作ったり出会えたりす

ることは当然なのではなくて、「とてもラッキーなこと」だと思っ  
ていたほうが良いことは多いような気がします。

そういう偶然の関係の集合体の中では、当然のことですが、気の  
合わない人間、あまり自分が好ましいと思わない人間とも出会いま  
す。そんな時に、そういう人たちとも「並存」「共在」できること  
が大切なのです。

そのためには「気に入らない相手とも、お互い傷つけあわない形  
で、ともに時間と空間をとりあえず共有できる作法」を身につける  
以外にないのです。大人は意識的に「傷つけあわず共在することが  
まず大事なんだよ」と子どもたちに教えるべきです。そこを子ども  
たちに教育していかないと、先生方のこれからのクラス運営はま  
ます難しくなると思います。「みんな仲良く」という理念も確かに  
必要かもしれませんが、③「気の合わない人と並存する」作法を教  
えることこそ、今の現実（そく）に即して新たに求められている教育だとい  
うことです。

菅野仁（かんのひとし） 「友だち幻想 人と人の（へつながり）を考える」による

\*概念 … およその考え。考え方のわくぐみ。

\*道普請 … 地域の人々が協同して道路を造ること

\*下刈り … 目的の植物がよく育つよう、雑草をとり除くこと

〔問題1〕 傍線①「友だち幻想」について、筆者がここで「友だち幻想」と呼ぶのは、どのような考えですか。次の□にあてはまるように、四十文字以内で答えなさい。

筆者の述べる「友だち幻想」とは、

〔四十文字以内〕はずだという考えのことである。

〔問題2〕 傍線②「現実的な根拠」について、昔の学校で「クラスはみんな仲良く」という考え方が実現できていたのはなぜだと筆者は考えていますか。その理由を二点に分けて、それぞれ四十文字以内で書きなさい。

〔問題3〕 傍線③「気の合わない人と並存する作法」について、あなた自身も今までの小学校生活で「気の合わない人」や「自分とは異なる考え方をする意見の合わない人」に出会ったことがあるでしょう。そのようなとき、相手とどのような関係を作り、付き合っただけでなく、あなた自身は考えますか。

あなた自身の体験を具体例として挙げながら、あなたの考えを四百六十文字以上五百文字以内でまとめなさい。作文にあたっては、本文の内容をよくふまえ、次の〔きまり〕にしたがって書きなさい。

〔きまり〕

- 題名・氏名などは書かず、最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 段落をかえたときの残りのます目は字数として数えますが、最後の段落の最終行の残りのます目は字数に数えません。
- 、や。や「なども、それぞれ字数に数えます。